

令和7年度 学校評価報告書

本園の教育目標

1. 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
2. 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
3. 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
4. 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
5. 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

本年度重点的に取り組む目標

目標1. 思いやりの気持ちをもって、他者と関わる。

目標2. 自然の中にある生物の命を大切にする。

目標3. 健康な体を育む一環として、食べ物に興味を持ち、食事を楽しめるようになる。

本年度重点的に取り組む目標の達成状況（自己評価）

目標1：思いやりの気持ちをもって、他者と関わる。

子どもたちが社会の中で生きていく中で、家族や友達と関わり、良好な関係性を築いていくためには、他者と関わる能力と態度を持つことが大切である。今年度は、他者との関わりにおける相手を思いやる気持ちに着目し、その態度が育まれるように取り組んだ。学年によって成果には差があるものの、子どもたちが相手への思いやりの気持ちをもって関わろうとする姿が見られた。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	子どもたちが思いやりのある関わり方を学べるように、日々の生活の中で先生が関わり方の手本を示す。	A	<p>園生活の中で、先生が子どもたちへの言葉掛けや喧嘩の仲立ちの仕方を工夫し、思いやりのある関わり方について振り返りを促すとともに、適切な関わり方の手本を示した。</p> <p>子どもたちにわかりやすく伝えるため、「ふわふわ言葉」（相手の心が温かくなる言葉）と「ちくちく言葉」（相手を傷つける言葉）という言葉を用いて、言葉遣いを振り返る機会を作った。子ども同士でも、相手の発言を「ちくちく言葉だよね」と確かめ合う姿が見られるようになった。こうした振り返りを通して、子どもたちは自分の発言が相手にとってどう受け取られるかに気付くようになった。</p> <p>振り返りの後に先生が相手の気持ちを踏まえた伝え方を伝え、手本を示すことで、子どもたちは相手を思いやりながら自分の気持ちや考えを伝える方法を学んだ。</p>
2	人との関わりの中で思いやりの気持ちが相手に伝わるように、コミュニケーション能力が成長する機会を作る。	C	<p>子ども同士のコミュニケーションを通して、思いやりの気持ちが相手に伝わる経験を積み重ねられるよう意識して取り組んだ。しかし、実際の取り組み状況を踏まえると、この項目に重点的に取り組んだといえるほどには至らなかった。</p>
3	異年齢の子ども同士の交流を通して、年上の子どもが年下の子を気遣って関わり、年下の子が年上の姿に憧れをもって関わろうとする中で、思いやりの気持ちが育まれる機会を作る。	A	<p>異年齢で関わる機会を通して、相手を意識した関わりが生まれるよう取り組んだ。学年の異なる子どもたちが参加する活動を企画した結果、普段は同学年の友達との関わりの中で思いやりの態度が十分に見られない子どもたちに、年下の子を思いやる姿が顕著に見られた。活動の場所を他の学年の子どもたちも目にしやすく、立ち寄れる場所にしたりすることで、他の学年の子どもたちはその学年の活動に興味を持つようになり、交流のきっかけとなった。</p> <p>異年齢との交流は、年上の子どもたちにとっては思いやりを行動に表す機会となり、年下の子どものためには年上の姿に親しみや憧れを持ちながら、思いやりを学ぶ機会となった。</p>

* 評価（A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった）

目標2：自然の中にある生物の命を大切にする。

命を大切にする態度は、幼児期から少しずつ育てていきたい大切な力である。今年度は、虫や植物など身近な生き物との関わりを通して、命あるものへの関心や親しみを深められるよう取り組んだ。その結果、生き物に興味を持ち、大切にしようとする姿が見られた。特に今年度は、とうきょうすくわくプログラムにおいて自然に関するテーマを設定したこともあり、一定の成果が見られた。一方で、興味や親しみを「命を大切にする事」の理解や行動につなげていくためには、今後も継続した働きかけが必要である。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	身近な自然や生物に関心を持ち、観察や飼育を通して命の大切さに気付く。	B	<p>虫や植物など身近な自然に触れる機会を設け、観察や飼育を通して生き物への関心を深められるよう努めた。年間を通して生き物と関わる中で、子どもたちは成長の様子に親しみをもち、その変化に気付くようになった。</p> <p>飼育していた生き物が死んでしまった時や、季節の移り変わりの中で姿が見えなくなった時には、残念そうにする様子も見られた。こうした経験を通して、生き物に命があることや、その命が失われる場合があることに気付く姿が見られた。</p> <p>自然への興味を命の大切さの理解にまで十分につなげることが難しい場面もあった。</p>
2	生物との接し方を学んだり、実際に生物と関わる体験を重ねたりすることで、命を大切に、思いやりの気持ちをもって接する態度が育つ。	A	<p>植物や生き物と継続的に関わる活動を通して、子どもたちが命あるものへの接し方を学び、思いやりの気持ちをもって関われるよう取り組んだ。育てていた植物が枯れてしまった時には、その原因を丁寧に伝えることで、植物も生きていることに気付き、以前より大事に接しようとする姿が見られた。</p> <p>虫の成長や死、生き物を自然に帰す経験、快適な飼育環境を考える経験などを通して、子どもたちは生き物に対する親しみだけでなく、思いやりの気持ちも持つようになった。</p> <p>身近な植物に関する絵本や図鑑を保育室の本棚に多く配置することで、植物に対する興味と関心を引き出すことができた。</p>

* 評価 (A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった)

目標3：健康な体を育む一環として、食べ物に興味を持ち、食事を楽しめるようになる。

子どもたちが健康に育つためには、様々な食べ物に親しみ、食事を楽しむことが大切である。今年度は、給食の食材への関心を高めることや、農園での収穫やクッキングの体験を通して、食べることの楽しさを感じられるよう取り組んだ。その結果、食材や食事に関心を示したり、苦手なものにも挑戦しようとしたりする姿が見られた。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	給食に使われている食材について学び、興味を持つ。	B	給食の食材に関する絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、食材がどのように作られるのか、食べることが成長にどうつながるのかを伝えた。その結果、子どもたちが給食の食材について話題にしたり、献立表を見たりする姿が見られ、食材への興味が高まった。また、興味を持つことで、苦手な食べ物にも挑戦しようとする意欲につながり、食事を楽しもうとする姿につながった。
2	農園で育てた野菜や果物に親しみを持ち、栽培と収穫、調理を通して食事の楽しさを感じられるようになる。	B	子どもたちは、農園で自分たちが関わり、収穫した食材が弁当やクッキング活動の料理として身近に現れることで、より親しみを感じ、喜んで食べる姿が見られた。 クッキング活動では、食材の味や食感などが調理によって変化することに気づき、美味しく食べる楽しさを感じることができた。家庭でも調理しやすく親しみやすい料理は、活動後に家庭でも作られることがあり、食事への楽しさがさらに深まっている様子も見られた。 農園に行く機会をさらに確保できれば、食材への親しみや理解をより深められた可能性があり、今後の課題として残った。

* 評価 (A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった)

総合的な評価結果

目標1：

思いやりは相手の立場や気持ちを理解し、適切な行動や言葉で配慮する心であり、日常生活や社会生活を豊かにする重要な要素です。単なる優しさにとどまらず、相手のニーズを考えた具体的な行動を伴うことで、信頼関係や協力的な社会環境を築く力となります。日々の他者との関わりの中で、①大人が思いやりを持った言動を示すこと、②子ども同士の関わりの様子を捉え、思いやりを持った言動を伝えたり、一緒に考えること、③他者に対する思いやりについて理解しやすい場面や教材を用いて子どもたちと話し合うこと、④子どもたちの思いやりをもった言動を認め、共有すること、などが求められる。こうした視点をもって取り組みが実施され、子どもたちが相手を思いやって行動する姿が見られたことは評価できる。

目標2：

身近な自然の中にあるおもしろさ・すばらしさを感じ取り、生き物を大切に思う心情を育むことは、「生命の尊さ」を理解することに繋がります。「生命の尊さ」には自分自身の生命はもちろん、他人の生命、他の生物の生命を大切にすることも含まれます。幼少期は生き物に興味を持ちやすい年頃です。そのため、遊び感覚で生き物とふれあい、生き物を傷つけてしまうということもあります。生き物にも生命があること、なくなった生命は元には戻らないことを日常生活全体を通して学ぶことで、自分の生命と同様に生命あるもの全てを尊いものとして大切にしようとする心情や態度が育まれます。次の2つの目標、①生命はかけがえのないものであり、自分の生命と同じように、小さな生命であってもその生命を尊重して接する大切さに気付くこと、②生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること、に基づき取り組みを実施し、子どもたちの興味や関心を継続的に引き出し、栽培や飼育、観察や考察を進めたことは評価できる。

目標3：

子どもたちは食べる喜びや楽しさを味わうことや食に関わる経験を通して食に対する興味と関心を高めていきます。幼児期に野菜や果実などを育てたり、調理に関わったりすることで、幼児なりに食べ物を大切にしたい気持ちや用意してくれる人々への感謝の気持ちが芽生え、食の大切さに気付いていくことにつながります。幼児がこのような体験をとおして、食べ物への興味や関心を高め、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにしたり、和やかな雰囲気です事をし、皆で一緒に食べると楽しくておいしいと感じる体験を積み重ねていけるようにしたりすることが大切です。①身近な野菜を育てる体験や収穫をとおして、食べることに興味や関心をもつこと、②調理を体験し、食べ物や食に関わる人への感謝の気持ちをもつこと、③収穫した野菜を調理して、皆で食べることを楽しむこと、などが実践されました。今後さらに目標を意識した取り組みを進めていってほしい。(ふちえ幼稚園園長 古庄宏吉)

学校関係者評価委員会の評価

- 周辺地域では畑の土や作物に関わる機会がないので、幼稚園でこのような体験ができることは非常にありがたいことである。今後もこのような環境を活かし、命の尊さや食育につなげていってほしい。
- 夏にモルモットが亡くなり、現在はセキセイインコと熱帯魚が飼育されています。モルモットに代わるような小動物が飼育されるようになると良いと思います。
- 年長組の宿泊保育では、夕食に収穫したジャガイモを使用してカレー作りを行いました。その後、家庭でカレーを作る時には親子で一緒に調理をしています。食べ物や調理に対する興味と関心が深まったようです。

次年度重点的に取り組む目標

#	目標	達成のための取り組み/評価項目
1	子どもたちが好奇心や興味をもって、わくわくしながら遊び、学べるようなとうきょうすくわくプログラムの探究活動を実施する。	<ul style="list-style-type: none">● 子どもたちの好奇心や興味に沿い、子どもたちが期待をもって取り組めるテーマを設定する。● 探究活動中の子どもたちの様子を学年の先生が振り返り、次の活動や環境構成に活かす。● 探究活動中の子どもたちの様子や気づきを、他の子どもたちに伝わるように共有する。
2	子どもたちが主体的に遊びや活動に取り組む態度を養う。	<ul style="list-style-type: none">● 子どもたちの興味や関心に沿った遊びや活動を展開する。● 子どもたちが自分の気持ちや考えが受け入れられていると感じられるようにし、やりたいことに安心して挑戦できる環境を作る。
3	友達や先生と共通の目的を持ち、その実現に向けて協力して活動に取り組む能力と態度を養う。	<ul style="list-style-type: none">● 共通の目的の実現に向けて、子どもたちが考えた、工夫したり、役割を分担したりしながら、協力して取り組めるような活動の機会を設ける。● 活動や遊びの中で、相手の気持ちを考えながら、自分の思いを相手に伝えられるように、適切な伝え方を学ぶ機会を設けるとともに、先生が子どもたちにその手本を示す。